

- p. 433-434 (:Engl, sect, vol. I, pt. 2, 1962).——T. G. 54(1971), p. 261-263 (:Engl sect. vol. II, pt. 1, 1970).
31. Sternbach, Ludwik: *Cāṅkya-niti-text-tradition*. Vol. I, 2 pts. Hoshiarpur 1963, 1964. III, 9(1966), p. 301-307.——Vol. II, 3 pts. *ibid.* 1967, 1968, 1970. III, 14 (1972), p. 257-260.——*Cāṅkya-rāja-niti*. Maxims on rājāniti, compiled and edited with critical apparatus. Madras 1963. III, 9(1966), p. 307-308.
32. Thite, G. U.: *Sacrifice in the Brahmana-texts*. Poona 1975. III, 19(1976), p. 276-278.
33. Taittiriya Saṁhitā with the Padapāṭha and the commentaries of Bhaṭṭa Bhāskara Miśra and Sāyaṇācārya, edited by N. S. Sontakke and T. N. Dharmadhikari. Vol. I, Poona 1970, vol. II, 1972. T. G. 54 (1971), p. 257-258, T. G. 55(1973), p. 513-515.
34. Yoroï, Kiyoshi: *Gaṇeśagīṭā*. A study, translation with notes. The Hague-Paris 1968. 鈴木学術財団年報 5-7(1968-1970), p. 55-56.

第五回東亜アルタイ学会

岡 田 英 弘

東亜アルタイ学会 (East Asian Altaistic Conference 東亞阿爾泰學會議) の由来については、本誌の第五十四巻第四号にすでに記したから、それを参照せられたい。前回は一九七一年十二月に開かれたが、今回はちょうど八年後の一九七九年十二月二十六日から三十一日に、台北市士林区外双溪の国立故宮博物院で開かれた。

その発端を記すと、同じく本誌の第六十巻第一・二号に報じた国際清史檔案研討会 (International Symposium on Ch'ing Archival Collections Located in Taiwan 一九七八年七月、台北) が、非常な盛会であったところから、主催者の中華民国側から、この次は東亜アルタイ学会を招請しようとの議が起り、ひきついで日本で開かれた第十五回野尻湖クワイルタイに参加した故宮博物院の昌彼得図書文献部長が、第五回東亜アルタイ学会を台湾で開くことを宣言するに及んで決定的となった。ただし第四回の中心的オーガナイザーであった国立台湾大学文学院歴史学系の陳捷先教授も、また昌彼得部長も、その後アメリカに客員教授としてそれぞれ出張し、陳教授は一九七九年九月まで、昌部長は同じく十月まで台湾

に帰らなかつたため、年内開催は至難の業と見えたが、両氏の実行力が物を言つて、結局、中華民国行政院教育部、国立政治大学、国立故宫博物院、国立台湾大学、太平洋文化基金会の五者がスポンサーとなり、予定通りの開会となつた次第である。

十二月二十六日(水)は、外国からの出席者一同の宿舎にあてられた、台北市中山北路二段七二巷九号の金星大飯店(Hotel Golden Star)のロビーにおいて、午後二時から四時まで Registration があり、ついで午後五時三十分より、同ホテルの餐厅において、この学会の会長たる台湾大学文学院長侯健教授の主催により、閩振興校長も出席して、外国人出席者一同の会食があつた。

二十七日(木)は、朝からバスで故宫博物院を訪れ、所蔵の満・漢・蒙・藏・回文資料の特別展覧を見たのち、離れの福利餐厅で四川菜のご馳走にあずかり、午後は院内を自由に参観、夕刻からまたバスで木柵の政治大学に向い、第一餐厅で歐陽勛校長からやはり四川菜をふるまわれた。そのあと別棟の学生活動中心のホールにおいて「阿爾泰之夜」なる催しがあり、民族社会学系主任の林恩頭教授の監督のもと、同学系のかわいい男女学生が少数民族の服装で歌舞を披露した。二十八日(金)は午前九時から故宫博物院の礼堂において開幕典礼が行われ、侯健会長が開会を宣し、閩振興台湾大学

校長が祝辞を述べたあと、PIAC (Permanent International Altaistic Conference) を代表して Denis Sinor (インディアナ大学教授) が、日本を代表して岡田英弘(東京外国語大学教授) が、韓国を代表して黄元九(延世大学教授) が、アメリカを代表して Paul Hyer (ブリガム・ヤング大学教授) が、それぞれ答辞を述べた。つづいてスポンサーの諸団体の代表、端木愷(東呉大学長、太平洋文化基金会董事長)、蔣復璁(故宫博物院院長) が挨拶をした。

十時三十分からは各国におけるアルタイ学研究の現状について、中華民国については陳捷先、韓国については成百仁(明知大学副教授) が、日本、アメリカについては各人がそれぞれ報告した。

午後は研究発表にあてられ、二時からの第一セッションでは、岡田英弘の司会により、次のペーパーが読まれた。

孫同勛(台湾大学教授)「北魏孝文帝の改革——新解釈」
林恩頭「隋唐に対する突厥の分割政策の研究」

唐屹(政治大学教授)「柯劭忞の『新元史』とラシード
エディーンの『ジャミア・アル・タワリーフ』に
記されたモンゴル諸部族の比較研究」

ただし林恩頭は急用のため出席できず、英文要旨を配布したにとどまつた。

午後三時三十分からの第二セッションでは、孫同勛の司会

により、次の発表があった。

李符桐（台湾師範大学教授）「金元代における道教全真派の歴史と教義について」

吉田金一「一六七六年のロシア使節スパファリの訪華に關する満洲文書と一九〇〇年に帝政ロシア軍が中国東北から持ち去った満文檔案」

広蘇美琳「[T'its'an 伝]（満洲語）」

李符桐もやはり所用で出席せず、英文要旨のみを配布した。

その晩は侯健會長の招待で、南京東路三段一七六号の成吉思汗餐厅の蒙古烤肉であった。

二十九日（土）の午前九時からの第三セッションは黄元九の司会であった。

崔鶴根（ソウル大学教授）「アルタイ系諸言語の數詞に（一）」

成百仁「満洲語における母音間子音複合の研究」

胡格金泰（國民大会代表）「満洲文はなおも重要である」（満洲語）

午前十時四十分からの第四セッションの司会は Stephen Durrant（ブリガム・ヤング大学教授）であった。

神田信夫（明治大学教授）「滿文世管佐領執照について」
細谷良夫（弘前大学助教授）「八旗營運生息銀について」

黄元九「同時代の朝鮮の学者の眼に映した清朝」

馮明珠（故宫博物院文献股助理員）「チベットをめぐる中英交渉（一八七六一一九〇六年）」

午後は自由時間となった。

三十日（日）は Excursion として、バスで大竜峯の孔子廟から、関渡の関帝廟（前庭で功夫映画の撮影中であつた）、石門の海岸を回り、金山の北海道海鮮楼で中食ののち、野柳の奇岩群の景勝を賞して台北に帰った。小憩ののち、再びバスで南京東路三段三四六号、白宮企業大樓八〇七号の太平洋文化基金会を訪れ、執行長李鍾桂女士の歓迎を受けて、スライドによるフリーフィングののち、忠孝東路四段三四一号の長風万里樓餐厅の北平菜の招待を受けた。

三十一日（月）は研究発表の最終日となり、午前九時からの第五セッションは Denis Shor の司会であつた。

哈榭楚倫（政治大学教授）「モンゴル・ハーンたちの髮型」

森川哲雄（九州大学助教授）「帰化城トゥメト旗の康熙朝文書について」

中見立夫（東京外国語大学助手）「少数民族の模索——ハイサンとウダイ再考」

Paul Hye 「日本のモンゴル占領（一九三一—一九四五）年」再論

十時三十分からの第六セッションの司会は陳捷先であった。

岡田英弘「ガルダンの死——時と原因」

張蔵（故宮博物院満蒙藏文股長）「康熙帝のガルダン征

伐に関する『朔漠方略』と満文奏摺原文との比較研究」

加藤直人（日本大学助手）「一七二三年のロブザンダン

ジンの反乱」

午後二時からの第七セッションの司会は Paul Hyer であつた。

松村潤（日本大学教授）「東洋文庫の満洲本」

Stephen Durand「満洲人のシャマン教についての清朝

初期の記述」

荘吉発（故宮博物院文献股編輯員）「雍正十三年（一七

三五年）の満文奏摺の研究価値」

陳捷先「乾隆滿文本紀鈔本二種の比較概略」

これで研究発表はすべて終り、四時からの Business meeting では、次回を日本か韓国で開きたいと、陳捷先秘書長から提案があつたが、即座には結論が出なかつた。これを

もつて閉会が宣せられ、バスで和平東路一段一二七之二号、師範大学総合大楼に至り、一階の書店でしばらく時を過したのち、地階の師大湘菜餐厅において、教育部国際文化教育関係局の鮑幼玉局長の招待を受けた。

明けて一九八〇年一月一日（火）は自由、二日（水）は外国人出席者の出発日となつた。こうした多少異例な日程になつたのは、十二月二十六日、台湾におけるガソリンの価格が一リッター十五元から二十一元と、四十パーセントの大幅値上げがあり、それに伴つて諸物価が急騰したためで、当初予定した十二月三十日から一月一日までの南部旅行が経費の関係で実施できず、急遽プログラムを変更せざるを得なかつたのである。このことに限らず、主催者側の苦心のほどがしのばれたが、それにも拘らず円滑な運営をなしとげた陳捷先秘書長をはじめとするスタッフの手腕と熱意に深甚なる敬意と謝意を表したい。

なお日本からの出席者は、細谷良夫、神田信夫、加藤直人、松村潤、森川哲雄、中見立夫、岡田英弘、吉田金一の八名であつた。